

よこはま支部だより

Vol. 50

広報委員会 発行日 平成21年12月31日

(社) 神奈川建築士会 横浜支部事務局 担当: 大平

〒231-0011 横浜市中区太田町 2-22 神奈川県建設会館

TEL 045-201-1284

FAX 045-201-0784

新年のご挨拶 横浜支部支部長 南 利幸

平成 22 年度の年頭にあたり、新年のご挨拶を申し上げます。会員並びに賛助会員の皆様に対しまして、謹んで新年の慶びを申し上げます。

昨年中は、横浜支部活動に対し、多大なるご支援ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。本年も会員並びに賛助会員との友好を図り、地域に貢献する支部を目標に努めてまいりますので、一層のご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

さて、2010 年の建築業界は昨年からのアゲインストの風、吹きやまず厳しい試練の幕明けとなりました。

昨年、鳩山首相が国連で世界に向けて宣言した「温室効果ガス 2020 年までに 1990 年比 25%削減」の目標は、一気に環境問題の関心を高めることとなり建築業界にとっても、さまざまなレベルでの取り組みを強化、促進を図る状況になってきました。

環境にやさしい電気自動車の出現は、自動車業界に大きな衝撃と変革を迫ることになったように、建築業界も二酸化炭素の削減を目標とする開発にしのぎを削り、技術力により生き残りを賭ける競争の時代へと入ってきました。

また、環境負荷の低減にあっても、新築を抑制し既存ストックを効果的に活用する流れは、より一層鮮明となり、公共事業の大幅な縮減政策とあいまって新規投資の過度な期待は不可能になりつつあります。既存ストック活用の取り組みも、過去に再々議論になりながら事業性に魅力を見出せず、盛り上りに欠けたままとなっていますが、今こそ覚悟を決め、建築業界あげて事業性に活路を見出し既存ストック対策に本腰を入れる時期でないかと思えます。

そこで、新しい社会や時代の空間創出を目指してきた建築士が主体的となり、既存ストックを効果的に生かすリノベーション技術の開発に積極的に係わり、ノウハウを蓄積し駆逐することで、リノベーションの可能性を大きく広げ、事業性に魅力が増せば、リノベーション社会への的確に誘導でき実践も図れ、建築士としての社会的使命を果すことになりはしないかと考えます。

社会は創造以上の大きな変革期にさしかかっており技術の停滞は一步たりとも許されません。建築士は社会の変化のニーズを的確に読み取り一手先を打つことが生き残りを賭けた大切な選択肢となると思えます。美しい地球は人間が作り出した二酸化炭素のために危機に瀕し病んでいます。美しい地球を取り戻し、次世代の子供達に残すため、建築士一人一人が英知を絞り環境問題に積極的に取り組みたいものです。

(次頁につづく)

タイトル	1
支部長 新年の挨拶	
52 回建築士会やまがた大会 山成・渡辺両氏受賞	2
銘木 星 雅巳	3
神奈川の森から生まれた ログハウス 吉原直美	4
横浜の茶室(鶴見馬場花木園) ○技術・情報委員会	5
溶融亜鉛めっき工程を見学して ○技術・情報委員会	6 7
フランク・ロイド・ライト 歿後50周年記念の催し ○広報委員会	8 9
テニス同好会だより	10 11
おしらせ・編集後記	12

終りにあたり、会員並びに賛助会員の皆様には、横浜支部に対しご協力ご支援を賜りますと共に引き続き支部主催の各種事業にご参加頂きますよう重ねてお願い申し上げます。

2010年が会員並びに賛助会員の皆様にとりまして、ご発展とご多幸を心中より祈念を申し上げ、年頭のご挨拶にかえさせていただきます。

建築士会全国大会 「第52回建築士会やまがた大会」

全国大会は、建築士の連帯と意識の高揚を図るために、毎年1回、全国47都道府県の建築士が一堂に会し、「式典」（*功労者・伝統的技能者・連合会賞の各表彰、*会務報告、*大会アピール等）、「まちづくり交流プラザ、セッション」等の諸行事を行い、その中で、建築士が担っている社会的役割と責任に対する意識の高揚を図り、建築文化の進展に寄与することを誓うと共に、まちづくり交流プラザ、セッションにおいては、広く一般市民の参加を募り、建築士に対する認識を深めて頂くと同時に建築士会会員相互の連帯を一層深めることを目的としています。（建築士会連合会 HP より）

今大会は、出羽の国から拓く建築士の新時代「市民とささえあう地域づくり」をテーマに、山形市にて、10月16日に開催されました。

山形は、駐日大使でもあったライシャワー博士に「山の向こうのもう一つの日本」と言われたところです。芭蕉で有名な最上川、山寺など山々に囲まれた自然豊かで、歴史に残る町並みや建築物が多く残っています。人情深く、何か懐かしく、とても癒されました。

神奈川県建築士会からは、約30名が参加されました。「まちづくり交流プラザ」に技術支援委員会の“スクランブル調査隊”と“子どもの生活環境部会”が合同で出展し、来場者コンテストで銀賞を受賞しました。

また、伝統的技能者には、歌田勝保氏（建具）、建築士会に貢献された功労者に上原伸一氏、石綿誠氏、そして横浜支部からは、山成芳直氏、渡邊一郎氏が受賞されました。

式典、懇親会での山成氏の喜びの横顔をご覧ください。おめでとうございます！！

今年は、10月22日に佐賀県で開催されます。

行かれたことがない方へ、是非、刺激を求め、知らない日本を探しに行きましょう！！



「銘木」

標題について、広報委員の方より強いリクエストがありました。はたして、二十代・三十代の建築士の方々はご存じなのだろうか？死語になりつつある単語ではないだろうか？説明を始めたらきりが無い？何から切り出そうか？悩みは尽きませんでしたし、当然筆も進みません。

ふと目に止まったTV報道で、事業仕訳がクローズアップされています。仕訳人が冷酷に役人の説明中でも言葉を被せるように遮り、切り捨てています。正義はどこにあるのだろうかと考えつつ、錯覚に陥ってしまいました。

仕訳人「この床柱や床の間材が無垢である必要はないのでは？」

「なぜ集成材ではいけないのですか？」

「無垢なので世界中に一本しかない？世界で二本・三本とあるものではないのですか？」

「この床の間の空間は無駄だと思いませんか？収納でつかえるでしょ！」

「はい！このチームの結論は予算削減で一致しました！」

そうなんです。銘木とは、このような時代では仕訳されてしまう商品かもしれません。

しかし、決して高価なものばかりではありません。無駄だと思われる空間が、心に余裕や安らぎを提供します。茶室の床柱には決まりがないといわれています。裏山の木を切りそれを使ってもそれが施主の度量であればよし。床の間の主役は、その空間に飾られる花々やお軸で、床柱はその引き立て役なのです。豪華で高価な床柱は、施主の満足は得られるかもしれませんが、多くの場合使い方が間違っています。

洋風でも、同じことが言えます。無垢のフローリングでは、乾燥品で仕上げがしっかりしていれば、必ず色や木目に欠点があったり、小節があるものを私は勧めます。何故かという、一番無垢らしいからです。また安く済むからです。高価できれいなものは、全く無垢らしく見えませんし、貼り物に見間違えることさえあります。昔タイやビルマによく行きましたが、チーク製材業者が「日本人の検品は厳しすぎる。柾が少しでも曲がっているとNO！香港やインドでは良品で通るのに」とよく嘆いていました。

民主党の事業仕訳ではありませんが、生活様式の変化、合理的な住まい、予算削減、職人さんの減少等で、「和」の住まいは仕訳されて続けてきました。健康のキーワードで無垢材の認識、需要は増えましたが、昨今のデフレの波にのみ込まれそうです。

世間一般では「贅沢」や「余裕」は「お金」に換算されます。しかし、それらの対象が「時間」や、「空間」であつたら全てが「お金」とはならないはずで、予算がないとはいえ、無駄がない無機質な空間で生活、家族、教育等の将来が不安です。

解決のキーを握るのは、建築士の皆さんであり、建築関連に携わる我々だと思っています。今年の夏「コンクリートから人へ」と連呼した人がいましたが、人を助けるため、育てるためにコンクリートがあり、木材があり、銘木があること、そしてそれらをうまく使うことが、街づくり、家づくりであり、人々を幸せにすることだと教えてあげたいけど、理解する能力は無いだろうなと思っている今日この頃です。

株式会社 星

代表取締役 星 雅巳

「神奈川の森から生まれたログハウス」

～丹沢の杉約 150 本、桧約 700 本を使用して～

神奈川県産材のみを使ったログハウスを見せて頂いた。建具を製作されている方の作業場兼住居である。建て替えの際、木を扱っている者としてせつかくなら“木”“ログ”で建てようという事である。

秦野市内の森林組合に直接交渉し、末口直径 20 c m φ 以上の杉、桧を計 850 本を 5 か所の山から切り出しをし、芯材をログ丸太に、端部はご自身でスライスし床材に、残った材は薪やチップにしご近所に配られたとの事。いかに廃材を出さないかを考えられたという。木材切り出しについては「新月伐採、4～6 カ月の葉枯らし乾燥の実施」とこだわられ、最初の伐採時にはお施主様ご本人が家族と一緒に 1 本伐り、木を伐る人と施主が直接顔を合わせ、施主自身も山を知る事に大きな意味があったと話をされていた。

「県産材を使って家を建てる」事についてよく話題に出るが、(地域によるが) 実際は材がなかなか揃わない等、色々大変な様である。特に今回の様に太い材を多量に揃える事は相当困難を伴い、理由は、山にそれなりの木がなかなか無い という事の様である。

建築にも「地産地消」が言われている。特に木など自然素材は尚更地元環境にあったものが最適であろう。

山に適材が無いのを嘆くより、使って使って、山を育てる事をしなければならない。

残暑厳しい折だったが、家の中に入るととても涼しいのに驚いた。また 2 階の住居部分で皆で話をしていたが、この木で囲まれた空間はとても落ち着き、ついつい長居をしてしまった。人はやはり自然のなかで過ごすのが一番素直なかたちだと思った。



(吉原直美記)

「横浜の茶室 (鶴見馬場花木園)」に参加して

伝統を学び、横浜流に解き放つ。

誰でも興味を抱く茶室。

なんか特別な位置にあって、やたら約束事があって、必ず理由があり、お茶を立てるだけの部屋でありながら無限大の空間を表現する茶室。

公共施設としての「横浜の茶室」とは、どんな茶室であろうか？



鶴見の谷戸の奥深く、静かな住宅街の先に現れた、むくり屋根と縦しげ格子のゲートは門構えからモダン。…横浜っぽい

引き渡し時に比べると、13年間で回りの木が伸び少し青々したくらいで雰囲気は変わっていないとか

13年前、大学を卒業して1年目にこのプロジェクトに加わった設計者の弁。

係わった3年間の記憶が残らない程、懸命に打ち込んだそうです。

CADはあるものの現在のような使い勝手はまだ浸透しておらず、CGパースを試み、細く有るべきものは細く、軽く有るべきものは軽く、スライディングウォールの軌跡を限りなく追及し出来上がったそうです。

ガラスやスライディングウォールで開放された茶室は、現在の解放された美術館や学校のさきがけの設計手法だったのかもしれない。

そんな中、表千家が70%と世間が教えてくれた常識で設計に取り組んでいた設計者が、鶴見区内では裏千家が70%であり、全てが違うと知った時の驚きと困惑した顔が目に浮かびます。

既製品が大嫌いという つわもの施工者の弁。
施主も設計も施工者もそれぞれに言いにくいところがある。設計者のこだわり、施主の妥協点など。
人間関係を最も大切にし、三身がうまくいく為に人間関係を作り上げ、物を言える関係に展開させる事を心掛けたそうです。



現在、担当者たちはそれぞれ独立して活躍中。陰ながらエールを送ります。

去年、「京都、国宝を巡る旅」で山崎まで行きながら参観できなかった利休の茶室「待庵」を再度見る機会があれば、比べたいと思います。

普段聞けない事を聞き、参加して初めて知ることの多い見学会は、技術情報委員会の企画の醍醐味です。是非、ご参加を！

(横浜支部 技術・情報委員会 高橋秀行)

溶融亜鉛めっき工程を見学して

平成21年10月9日 技術・情報委員会主催

いわゆる「亜鉛のドブ漬け」のめっき工程を見学しました。

鶴見駅前からバスに乗って15分くらい、降りたバス停の右前方に工場はありました。

『会員の能力の維持・向上の一環として、亜鉛めっき工程やその周辺の諸事情について学ぶことにより、より一層の業務の質の向上を通して、顧客の満足の増大と社会への貢献を図る。』ことを見学趣旨として、横浜ガルバー株式会社を、20名で訪問しました。

説明と案内は、工場長・常務取締役と技術開発担当・取締役のお二人でした。

全体を通しての説明の後、安全に見学することと説明が聞きやすいように2班に分け、A班は映像などで説明を聞いてから工場・試験室の見学、B班は工場・試験室の見学をしてから映像などで説明を聞き、その後に合流して質疑・補足説明を受けました。



説明会場の模様



工場長による工程・製品などの説明

最初の打合せの段階で見学趣旨と要望事項を伝え、その後、参加者全員から質問を募り、15項目の質問として見学先に提出しました。



操作室の網入りガラス越しに見ためっき槽



めっき槽で450度前後に溶かされる亜鉛インゴット

「めっき工程」は、入荷検査→脱脂→中間検査→水洗・酸洗→中間検査→酸洗水洗→鉄面防錆→めっき準備⇒めっき→冷却→中間検査→仕上→完成品検査→皮膜状態確認→出荷と、12回の前後処理と3回の中間検査を経て加工製品となります。

これらの工程は、めっきされる鋼材が天井クレーンにより吊り下げられ、操作室からの遠隔操作により、次々と処理槽に浸漬・吊り上げを繰り返されて行きます。

「めっき」の品質・工程管理の要点は、『亜鉛が溶けているめっき槽の温度とめっき槽に漬けている時間』とのことでした。単純そうで神経を使う難しい作業のようです。

工場では、若い人たちが分担した役割を真剣に果たしていて、活気に溢れていました。

事前に提出した質問の回答は、説明の中で口頭で話されるだけかと思っていましたが、15頁に及ぶ立派な冊子になっていて、カタログ・技術資料と共に提供され、要所急所は懇切丁寧な解説がありました。

めっきについて初めての経験の人、多少の知識を持っていた人、いずれにしても、耐久性と経済的優位性、それに加えて、使い方により採用機会が増えることは間違いないと、新たな気持ちで「めっき」について考え直したいという人が多かったようです。

事前の打ち合わせから当日の準備万端整った見学会まで、快く受け入れてくださった会社の皆様に感謝し、見学者の皆様にもご苦勞様でしたとねぎらいたいと思います。

見学者からの感想の抜粋

- 映像を見て工程を知った後に見学したので、作業の流れを理解しやすかった。
- 他の設計者が設計した建物を見るよりも、技術的な事柄に関する見学会の方により興味を覚えます。
- 見学してみないと実感できないことを体験する良い機会でした。建築現場での鉄部塗装の耐久力のことを考えると、めっきをもっと取り入れても良いとの考えを持ちました。
- 亜鉛めっきの工場見学は、なかなかできないことで、大変興味を持ちました。当たり前にあるモノを、その作ることから知ると、ひとつひとつのモノに多くの人の思いが感じられます。亜鉛めっき工場を見学して改めて感じました。これは、モノを大切にすること、エコを考えて行くために大切なことではないでしょうか。企業としては、営業に繋がりたいのが本心だと思います。しかし、「めっき」という技術を多くの人に知ってもらい、それが生活にどのように生かされているかを伝えられると、日本の環境は変わっていくと思いました。



最終処理槽と処理済みの製品



製品検査用の限度見本

JUST NOW! Frank Lloyd Wright's ARCHITECTURE and ARCHITECTURAL THOUGHT

支部便りが今号で 50 号となりました。この 50 という数字、実は建築家 F.L. ライトの歿後 50 年にあたる年でもあります(*1)。これを記念した催しがここ数カ月のうちに幾度か行われています。幸いにして、士会のある方からのお誘い等により、この貴重な節目に立ち会う機会に恵まれました。そこで、今回は番外編として、ライト歿後 50 周年記念関連の催しを幾つかご紹介します。

†～ライトの空間作り～見学会 in 自由学園・明日館

この見学会は 10/2 (金)、日本に現存するライト建築の一つ、自由学園・明日館(*2)にて、近代の建築家の偉業を辿り精神的な原点を見直すという趣旨のもと、某協会の主催により開催されました。きたるべき 50 周年記念シンポジウムの先駆けともなったこの催し。前半は明日館の方より、建物を巡回しながら、竣工経緯や動態保存、復原・再生 (1999～2001) の観点からお話を頂きました。構造体は 2x4 の前身であるバルーン工法。構造の補強をはじめ、漆喰壁や建具の色あいの再現、材の再利用の判断一つ一つの苦労話が印象に残ります。復元に要した総費用は実に 7 億にのぼるとのこと。また、開校当時の古い記念写真を見て、「これ私!」という当時の女学生がまだ御健在というお話には正直驚きました。

後半は、A. レーモンドの弟子にあたり、ライトの著書等で御活躍されている建築家の三沢浩氏による講演です。氏曰く「私はレーモンドの弟子であって、ライトのことは・・・」と終始御謙遜でしたが、氏のライトに対する知見や分析眼は大変なものです。

ライトの人柄をはじめ、プレーリーハウスから 25 年を経てユソニアンハウスへ向かった経緯、自然との共存、雑誌等では決して見る事の出来ない落水荘等のスライド写真の数々、氏の著作である「空間の四十八手」(*3)からのお話等々、書物からは得られない、ライトの身近な内容を含んだ貴重なお話でした。

†F.L. ライト歿後 50 年回顧展 in 自由学園・明日館

この回顧展は 11/3～11/14 の間、同じ明日館にて、ライトの大家である谷川正巳先生が監修を務められ開催されたものです。パンフには「ライトの評価が、我が国で 50 年を経て変わったのかどうか? 歿後 50 年を期に過去の展示会の回顧展と初展示品を交えて再評価を試みる」とのお言葉が記されています。回顧展では、当時の原始的ともいえるプレゼンが印象的でしたが、講堂に設置された木製の 1/100 模型は圧巻で、林愛作邸、福原有信邸等、日本におけるライトの仕事の模型が多数展示されていました。その他、ライトの椅子 (旧帝国ホテルのピーコックチェア) に座れることも本展の目玉で、遠藤新や作家不詳の椅子と共にホールにしつらえられていました。



明日館: 外観



明日館: 2階食堂



回顧展: パネル展示の様子



回顧展: 遠藤新設計の講堂と模型展示



回顧展: ライトの椅子 (ピーコックチェア)

†ライト 50 周年記念事業 —建築家 F.L. ライトのビジョン— (*4)

11/29 (日)、東京藝大音楽学部にて開催されたシンポジウムでは、大勢の参加がイベントへの関心の高さを物語っていました。講演やパネリストの面々は、英国より J. サージャント氏、アメリカよりタリアセン・ウエストに自邸を持つ建築家デビッド・E・ダッジ氏。日本からはライト言説研究で有名な水上優氏、ライトや遠藤新に造詣の深い南迫哲也氏、アメリカ文化史に詳しい生井英孝氏。ライトと関わりある方やライト研究に携わる錚々たる顔ぶれです。内容は主にライトの建築思想や時代背景に焦点があてられ、ライトが当時のアメリカの資本主義社会に抵抗しながら、ユソニアンハウスやブロードエーカーシティを生み出し、自著のリビングシティを、改定を重ね昇華させてゆく過程が丁寧に語られてゆきます。ライトの所謂「アイデア蓄積・成熟の時代、不作・失われた時代」に関し、その間は大戦間期 (1920~30 年代) の「バブル~大恐慌」という特異的・象徴的な時代で、当時の社会背景や文化、そして中西部の風土と人脈 (革新派との交流) が、のちのライトに影響を与えた、とする生井氏の切口が、大変具体的で示唆的でした。水上氏は終盤、「ブロードエーカーシティは何処にでもあり何処でもない都市、それは？」と会場に問います。ダッジ氏は自邸紹介を交えつつ、「欲望を満たすだけでなく喜び・楽しみ・笑いのある空間をつくりましょう！」と自らの講演を締めくくられました。シンポジウム・懇談会の後の会食では、ライトが当時おこなっていたとされる晩餐会「タリアセン・イブニング」を再現するという、極めて粋な試みが用意されていました。メニューにおいてもタリアセンのレシピとして数点が再現され、当時の晩餐会の逸話や音楽学部生によるモーツァルトの演奏を交えながら食事を頂くという、滅多にない貴重な体験をさせていただきました。

†ライト 歿後 50 周年関連のイベントを通して

現代の日本はまさに変革期を迎えています。金融不安や法改正に端を発した建設不況や雇用不安、相も変わらずの人口集中に加え深刻化がますます懸念される少子高齢化問題、地球温暖化や環境対策。そして、政権交代、円高にデフレ…。

何故今ライトなのか？ 歿後 50 周年イベントの数々は、ライトの建築や建築思想を通して私達に考える契機を与えてくれています。最後に、今回のシンポジウム運営等に御尽力された、あるお方のお言葉をここで御紹介しておきます。

「ライトは大恐慌時代において何をしたか？」

「そして現代、我々は何をすべきか？」

「JUST NOW！」

広報委員 桶師徳行



会場に設置されたブロードエーカーシティ



シンポジウムの様子



カクテル懇談会の様子(中央にダッジ氏)



タリアセン・イブニングのメニュー



タリアセン・イブニングでの演奏会

*1) F.L. ライト : 1867-1959

*2) 自由学園・明日館 /F.L. ライト
1997 年 国宝・重要文化財指定
東京都豊島区西池袋 2-31-3
(JR 池袋駅西口より徒歩 7 分)
<http://www.jiyu.jp>

*3) 三沢浩著 /王国社刊
「フランクロイドライト入門～
～その空間づくり四十八手～」

*4) ライト 50 周年記念事業
<http://www.wright50years.com/>



テニス同好会だより



定例会報告

・平成21年9月12日(土)

練習PM 5:00~7:00

金沢産業振興センターA・Bコート 参加6名

8月は申し込み方法が変わりコートが取れずお休みでした。

テニスの申し込み方法もIT化が有利になってきたようで

「足を運んで申込書を提出した方が不利になるなんて納得できない！」

・・・なんて言っていないで、時代の波に流されます。



・平成21年10月10日(土)

練習PM 5:00~7:00

金沢産業振興センターCコート 参加12名

コート1面でしたが、久しぶりにたくさんの参加がありました。

初参加の駒井さんが加わりゲーム主体で行いました。

2次会無しでちょっと寂しそうでした。



・平成21年11月14日(土)

練習PM 5:00~7:00

金沢産業振興センターA・Bコート 参加11名

昼間の雨がスッキリとあがり、しっかりテニスが出来ました。

内容のある練習とゲームを行いました。

5時でも暗くなりましたね～



テニス大会に参加!

磯子区民秋季硬式テニス大会(個人戦ダブルス)

9月26日(土)

毎年5月に団体戦に参加していますが、秋の個人戦は各自希望者が参加しています。今回、内山・萩野ペアが第3回戦まで進みましたが残念ながら4位となりましたが・・・凄い!

第20回産連協主催テニス大会に参加

11月8日(日)

我がメンバーから5組が参加して、河内・荻久保ペアのみ1回戦を勝ち進み、惜しくも準優勝チームに2回戦で負けましたが、天気もよく、気持ちよくできました。



同好会会員募集中!

テニスに関心のある方どなたでも参加可能です。特に女性大歓迎!お気軽に連絡下さい。ご連絡の際はメールの場合でもお名前、連絡先の記入をお願いします。詳しくはホームページをご覧ください

連絡先: 玉野 045-894-8452 FAX893-6614



冬の合宿&忘年会

12月5・6日 場所:逗子マリーナ テニスのみ参加7名 宿泊参加者10名、

恒例の逗子マリーナでの合宿&忘年会は、コート確保が難しく今回で最後となりました。今年は逗子マリーナのコートがスクールに殆ど占領されていて、競争率が高いコートを斎藤さんを取っていただくため、ご苦労をお掛けしましたが初日は1面も取れなかったため、場所を変更し例会会場の金沢産業振興センターを2面4時間なんとか確保する事ができました。

11月には合宿幹事の竹中さんの呼びかけで、予め合宿に向けての打ち合わせを行いました。

募集したところ、初日のテニスだけは参加するという方が6名でしたので特に初日の天候は気になるところでした。天気予報では午後から雨ということでしたが、おかげさまで2時間はプレーをすることができました。終始試合で皆さん満足だったのではないのでしょうか？



1日目集合写真



試合結果！

・見えない？



忘年会の様子



人生談議？



2日目集合写真

逗子マリーナ忘年テニス合宿を終えて



同好会会長 内山 勝麗

合宿の目的はテニスを通して個々にコミュニケーションをはかりその人の意外な面を知ることが出来る場であり、テニスのレベルアップを図ることであると思います。

毎年12月第1週の土日開催の忘年テニス合宿を始めて十数年経過しました。逗子マリーナという湘南の高級リゾート地でのテニスは、いかにもHIGHT SOCIETYなスポーツと感じられます。同好会会員の斎藤氏夫妻の行為により長い間続いた逗子マリーナでの忘年合宿はテニスコートの確保が難しくなり今年で最後となりました。斎藤夫妻には、長い間のお世話本当に有り難うございました。

いつも鍋料理が定番であり食材を持ち込み皆で作っています。去る12月5日は途中から雨が本降りになったためテニスを早めに切り上げ、場所を移動し皆で協力して準備をし、10名で鍋を囲んで夜遅くまでテニス、人生談議と花を咲かせました。翌日は、最後にふさわしい晴天に恵まれ、富士山、江ノ島、青い海、そして白い船と最高の風景を眺めながらの朝食、いつもセカセカした生活から見ると命の洗濯をしたかなと思われる程でした。最近合宿の参加者も減少し寂しくなりましたが合宿の魅力をもっと知って欲しいものです。いつも先頭にたって合宿の準備をしてくれた玉野、成田、斎藤夫妻の各氏、合宿係りの竹中、鈴木およびボール係りの河内の各氏、他関係者に深く感謝する次第です。

同好会のテニスのレベルもかなりアップし、対外試合にも参加し仕事のストレスを忘れ、仲間と汗を流すことに意義があるのであり、同好会は皆で作りに上げていくものだと思っています。今後、逗子忘年合宿に変わるものが来年出来るか分かりませんが、合宿の魅力を皆が味わって欲しいものです。

今年も無事終えることが出来ました。斎藤夫妻、幹事の竹中さん、鈴木さん、ご協力いただいた皆様どうもありがとうございました。

～お知らせ～51号にレポートいたします

1. 技術・情報サロン「150歳の港湾都市横浜へ Part II」

12月22日(火)15:00～

第1部：海事広報艇「はまどり」による横浜港視察

第2部：講演会 国吉 直行氏 × 横内 憲久氏

第3部：講師を交えた懇親会

2. 厚生委員会によるバス研修旅行（10月29日）は、本会の「SALON」No.57に掲載しておりますので、ご一読ください

■ 広報委員会からのお知らせ～ 横浜支部 ブログへの投稿をお待ちしております!!!

新しくしました横浜支部のホームページのブログへ書き込む時のIDとパスワード(PW)です。

ID : yokohama-sibu PW : blog4us

● 横浜支部賛助会の皆様へ

頁の最下段に会社のロゴなどの広告掲載(バナー形式)を無料にて実施いたします。 広報委員会

□ バナー作成について

- ① バナーは、縦35mm。横105mm。解像度を300pixelでお願いします。
企業スローガンや、住所や電話番号を記載されても構いません。
原稿はカラー(支部のホームページに記録)。実際に会員配布されるものは、白黒です。
- ② 広報委員会(大貫)まで、メールにて送信。メールアドレス ohnuki@dream.big.or.jp
- ③ ご不明な点は、広報委員会(大貫)までお問い合わせください。

広告バナー (見本)

(左) 神奈川県船協正会 (右) 横浜支店

編集者(あいうえお順)

雨森隆子・大西正行・大北晋一郎・大貫 浩・桶師・小俣 隆・田川尚吾・玉野直美・橋本朝子・丸山幸一

編集後記

新しい年を迎えました。大いなる希望に燃え今年はやるぞと思いたいところですが今年は更に厳しくなりそうな気配です。でも新年位は明るく行きたいものです。今年は横浜支部でもゴルフコンペが有るようなので参加し優勝を夢見ております。ほかに横浜支部では四つの委員会があり、様々な見学会、懇親会等々企画がありますのでできうる限り参加し楽しみたいと思っています。